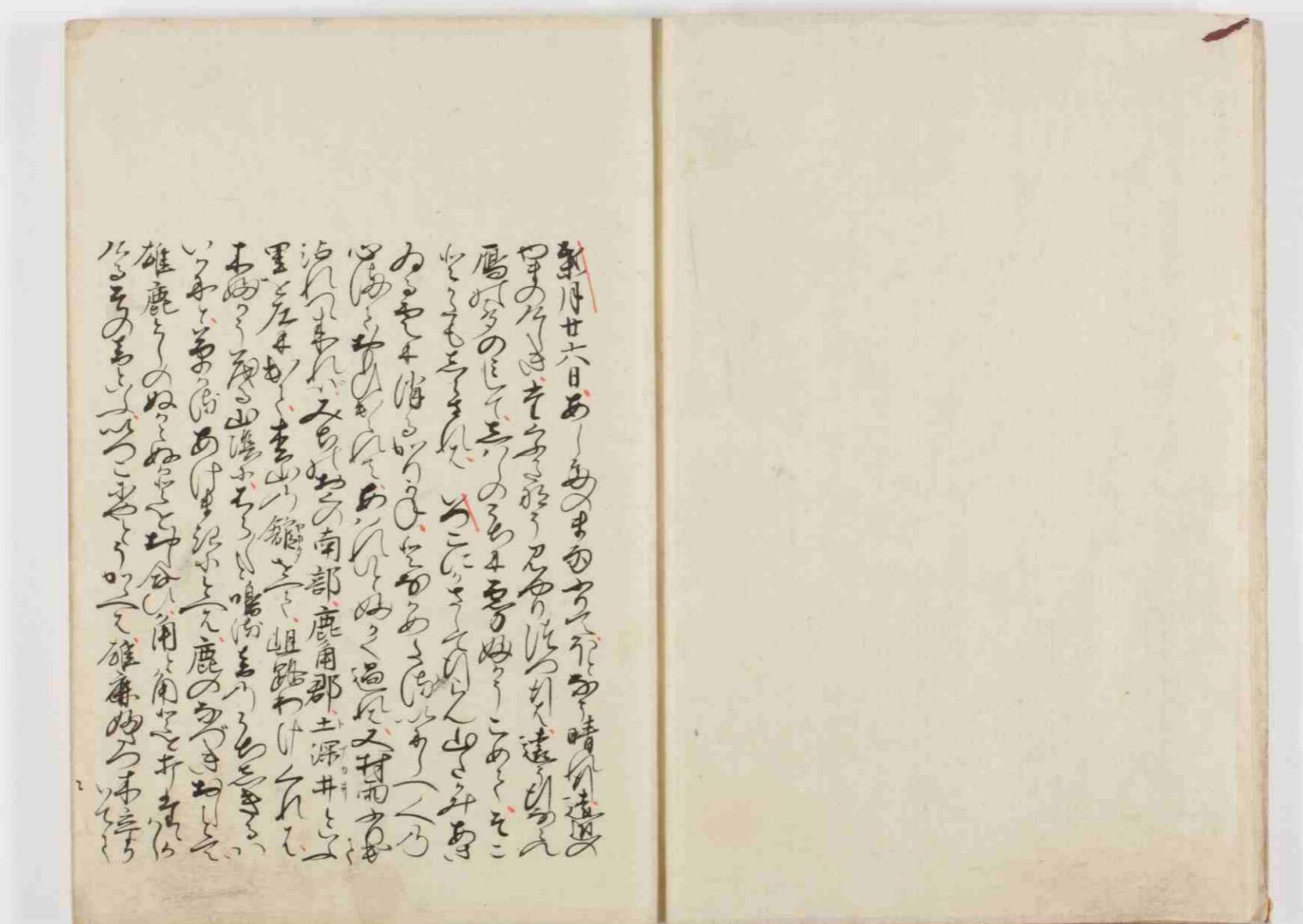


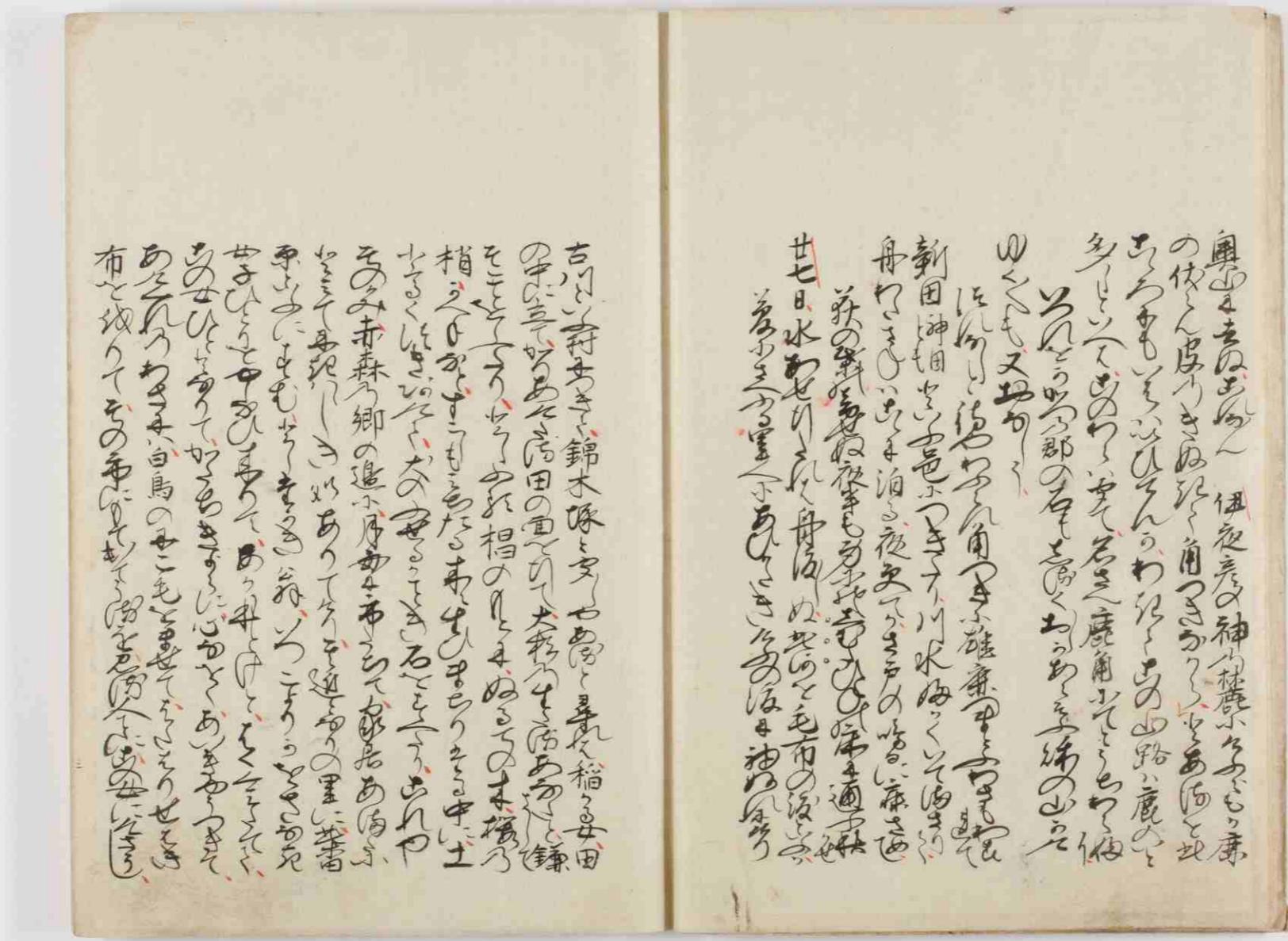
以下 汚れあり

破損あり



天明五年秋九月
南陽の鹿角郡
錦木の事の岩手郡和賀郡
仙臺路から江刺郡片桐邑を訪ね
立候せりと余りにかくらひ
三浦も多めせむれどもあつく





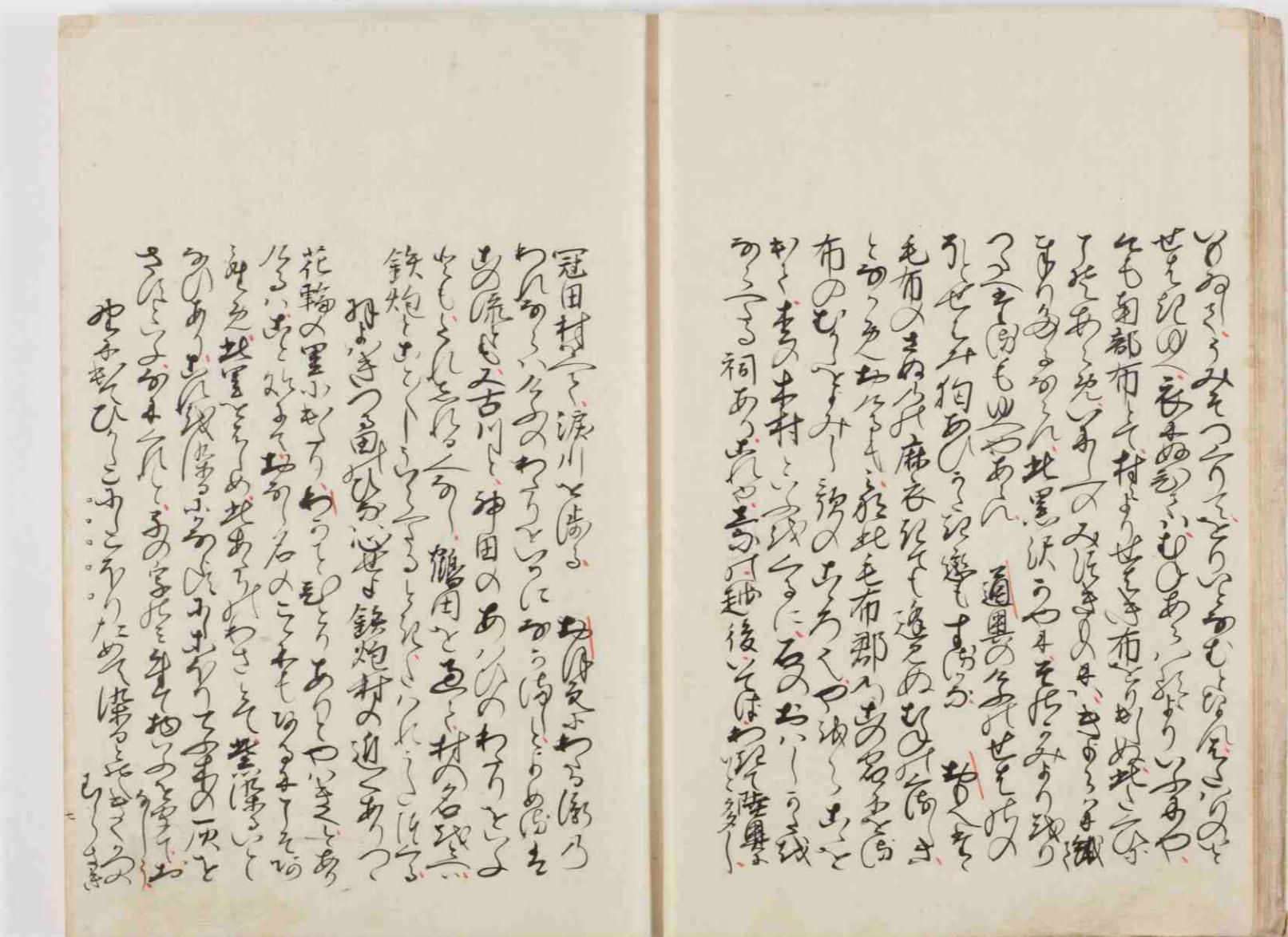
又も布のてまとてわいひひそひひそす廣の原
官里は男あつて世をゆきわづか、根のまもぬのま
ゆみのあらん。酸の木勝軍木、うぶらく苦木うじき、
鬼箭ききりはくをなき。酸の木勝軍木、うぶらく苦木うじき
似おなる。あくまで里は、あらそひの本枝もとえだ三尺あらそひ
あつてもいきえどよろう。あらそひの本枝もとえだ三尺あらそひ
一車いつかあらそひからう。本枝もとえだひでちあらそひ仲人なかひと本枝もとえだをま
てあらそひ世をす錦木にしききの木きもわざてもくま
み年としをくじく。あらそひもくらまくまく
ひまくらくらひうの木きの男おとこあらそひ本枝もとえだと市路いちじゆ
あらそひとくらひうの木きの男おとこあらそひ本枝もとえだと市路いちじゆ
見えやすき男おとこあらそひと夜よえまくらひとおひ
とおひとくらひとあらそひとシソシソ、千束せんばくともあらそひ
あらそひとくらひとあらそひとシソシソ、千束せんばくともあらそひ





男の立つる年より錦木はもじらすをよ祖
寺と達て錦木の觀音寺をひりとす。萬葉歌
の小をよみてひれぬをもととす。寺と寺
の枝のよみにひらきとす。萬葉上本が絶手をひく
錦木持ひとす。かのを傳ゆうとのりを家
細君の抱あはせし所とぞ。おもむきを傳ひ
字の所とぞ。まの因の傳とぞ。おもむきの傳とぞ。ひ
くらむとぞ。まの因の傳とぞ。おもむきの傳とぞ。
海とくらむとぞ。まの因の傳とぞ。おもむきの傳とぞ。
おもむきの傳とぞ。まの因の傳とぞ。おもむきの傳とぞ。
おもむきの傳とぞ。まの因の傳とぞ。おもむきの傳とぞ。

うのよしう房で機を成す者と此書の
中に其あらわしあり是れと云ふのくは作、鋤鍊立て
かく其の事とあらわす所とてに及づるは又傳も
さるる高弟も其とて有記、されど下り、毛布
とねわきひく紙、やうなとひ紙と又繩と
やうと荷取と金と世不在るもあらう奥本
りあらわむとこりと子細を致思ひみ
ひ古所の村を黒澤兵之助とそのの娘小篠
ともとよしとそら名を尋ね、あれの口からち
聞りまへうるを島人毛利をしてとて、乞はせ
てうかうか、君ナモカトゆふ小豆のふきを
のうかうかに江津のうごとてひり、お鐵、お湯



うもぬる館唐支室、ひゞく筑蒲らむらは
やの外寺と名母をえうすと難てあらず徳ひ
立之瀬あぬ花園の吉原もひゞく筑蒲
大室材そつて作山派とするもとある。
廿日、いづゆくおき、旅宿と云ひ、遠くの山
毛とく木をひづやくある。銅ゆくすり
うなとく、馬の歯づがくをまわす
みそ革、革とへて、馬の歯づがくをまわす
といひもあらりまうると見て、うかぎの
あらうとねをとどらむと見て、
廿九日、夜逃げのあはれ、壁の色のもの
のあかさとすよあれ、仰事とすがちとひ

かう月日、満きあまのひえり、川水のひえり
ひのめせらモセとめに、年もぬくも在、廻
あうともありす、福田山大徳寺に遊び、惠青ト
著宿と云ひ、あらひ、此うき、わざうわざと書
ひゆきもあせ、ああ況々やゝく、ぞう
ひづくとあくと、れんひ、ああ況々やゝく、ぞう
ひづくとあくと、れんひ、ああ况々やゝく、ぞう
ひづくとあくと、れんひ、ああ况々やゝく、ぞう
錦木山觀音寺由来記、と書いて、正しくて、
冊あらひ、えとすと、おお、おお、おお、おお、おお、
おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、おお、
惠正法師の心願也、達成すと善ひと云ふ

此觀世音者人皇世六代皇極天皇之御頼所當國之大守敏達天皇第五之宮瑞籬皇子之御建立也其源者人皇捨三代成務天皇之御宇奧州黎民動干弋度度也其來由者地理不分明而民爭奪境小者無勝大者結黨而鬭爭故置郡司正邪正北與州五郡者太乙貴命二十六代之苗裔狹名大夫同帝三歲御下向當國置吏長分地理之上下定町數限堺令開塘溝教農耕之道自是農夫等悅伏而無爭堺民人伏帝褒美其勲巧改豐岳里狹名之以

狹字稱號狹郡狹名大夫居官三拾七歲仲哀天皇二年於狹郡豐岳之邑薨狹名大夫八代之後流政子女得土布絹或時織始毛布民間之兒女習之而色色雜鳥毛織毛布其頃同郡草城里長之子某戀慕政子女而立錦木三歲既及千束政子女初程有慙人恐父心重月而見彼容兒吾故不似初面瘦恨聲入身中如爲破身乍在身者古洞里心者在草城里而業郎荒父大海云先祖文石不幸而落民間家貧而雖在民間自狹名大夫八代家名人知之嫁里子

耻家名先祖不孝之至也制之不許嫁長子自是伏病床斷鍼藥飲食推古天皇七歲七月十日遂早世政子女哭泣無止心胸大痛暈倒而同月十五日誘引無常風命葉忽落大海悲嘆餘乞長子之亡嚴同穴政子女而以千束之錦木共埋之故号錦木塚其後敏達帝之白皇子第五之宮者臣守屋之女岩千姫御子也故除白皇子之列奉成庶人配流奧州當國之部吏猪人依蘿我馬子下智爲奉弑北奧之部吏有麻呂竊奉迎立之宮造奉恭敬猪人

初五郡之官司等來豐岳里敬伏三十
六代皇極天皇元壬寅之歲立之宮搭
三年配流有勅免而上京在配所五十
年此時當國之產物毛布細布三百反
砂金百兩獻之自是爲貢物帝曰大
職官錦子朕伯父七人叔母十人幸五之
宮殘命父大兄皇子爲再會之念御落
淚甚其時錦子毛布細布由來達獻聞
御感淚流狹名者在往昔又云
勲巧臣且而名也命哉至政子女家斷絕
堪痛哭草創一宇之堂慰云魂賜正觀
音一軀御長一尺八寸末法之僧善信自

皇極天皇元年八
詩附天皇世七年
丁巳ニテ己子ニテ
壬寅ニアテス

百濟國持采木像。誠難有勅願也。同
四年、五之宮造立一寺所賜之安置觀
世音稱号錦木山觀音寺。孝德天皇
大化己亥八月、導師惠正法師敬白。
さうすかうのまのひかがねのもとお絶縁せ
りしもかうらのまつらすとおれく。寺
千多じゆゆとせんを傳てに足りる。
二日、舟ろきしも無る。よしと多くお免
入心川うちて以てよ。

昨日妻多の四布半をまはむひと泥割物
とそやまと小豆沢村をあわせひあそび大日如
来の堂ひうそのゆとそだみ田山の庄ひうそふ
男起あうやじろの多うとよま。せまうと浮
ふぬ。妻もひら物でなうやうよ。男とあうぬ
と聞てさうのぬとつてひとたれ。せまうと浮
ふぬとまて浮き。吉もとす泉とす。色は蓋もと
を酒もあかられ。ひきひますけ玉手のひの
酒の泉のからくに象をく。の吹牛房す。皆酒
をあうぞとす。常言とす。之も。事まうとす。
至うねるよ。あく。聞せ給す。うまうあ。まうよ

あざくらつて此女あるのを、わざとうちぶり給ひて
侍后よりせせらぎとおん里へ蜻蛉とせんひよと
ソシモチのところへあびき長者とゆうけゆゑ
まちも居るどもかくすうひうへ歩、三河く
流くれば水も音のかせ、切きるべ、米白川村
皆の鹿角のやうもありみてあつれど、鹿角の
庄といひ、郡も猿布といひと、そりへかつの郡とい
ひをせり、長者方ゆうてめらあますて御
の勅命ゆて、養老の比とうやするうちより名前
養老を喜徳寺とす、三野川尾瀬のむ、御河は
かく、ゆきも生じねど、とある御名もあ、運度
の役、大尊あはゆ佛さんへゆく。五に山内向ふ

まをかく食う、かくの大粒の、養老をひこと要
等の河あさみの、河舟の、こうだいと左まきゆき
ひじて、かくの活りと、萬床橋をみて、
名前をうするも、日本通も、うして此橋は天狗の
わうあ珍しき、人と手て待ちひ、又て外鈎本
門として、あらそりぬと、のまに在りあり、
ことと夜馬を鳴とくと、もの左の玉、ひくまを
前途の事あす。山をも島、夜馬の名を聞ぬる
湯瀬とひて、仰折八三とひると、うつて、湯
あひて、うつて、不當に、うつて、まどが、うつて、山と方
腰ふほむと筋を、万太幾と、ねぐ人の名へ、ひくとく
くらがひくとくと、西とせあひて、遠の高と、あく

冬至あはれと涙する事の如くせうすはう嗚
ゆゑああきこひもとて山手のアリモの子の
安井半之の温かいものとせむあらぬく
夜をもててまへあはれ布加シムアキモの
五感をうちてえりか世を痛むじみたとひ、又
むひ、寒がね野に身をもよおして思てやまんとて
煙草捨てぬ事いぬもゆきと茶筒かくさの事
あんとあるとてみをまし左の膝とあらわし
をまうよりぬまきせめりてあらさまあとも
せれひと里のあくとそあもろ人年もあらう
竹も尼いと彼にともしう引ひだして五右衛
席の事はまことうう涙すと名乗る

名遊事あひの波高さうかくせうとあせひ
もあめのちも床笠ひふきうとばとうちのミ
サキ捨まつもれぬに転らひゆく麻せう
かうひ、あらうきる、風かく、
ゆきのせうめぬうかうきとぬる梅鹿
三日湯舟をすこまえれあうほうせ起敷、
名高ひわきてとせきまきのひまや小次と
南小長キとシテ山下砂金かるとす、皇室
名をあらめ、齊田、兄姐、佐昌内侍とて
折壁と雪のあく頃、周りうきて西の
川越を望みのこひもとせよみまつまつ

と椎室を廻へ林もあらぬ山ぐるさき者も
ひるまうりともすやうて、
くらまと泥面と衣ぬきとあとののせせせせせ
あるるる城されいくすとひてみ猪とくわぬ
やまと田と山里とがくとおのうすれ林きてひのじ
金めくと曆よとあらうをまつと毎月の
敵と形をみて田邊耕の酒とまくらゆかなる(あ)
くらうちくらうとすやすとある

冒(ぼ)うすとあす苗代沢村、梨木崎(なし木崎)
男(おとこ)をりととて名(な)はれとまはるすふゆ
をととえ一(ひと)ましむる、一里とす六町と一里としひと
つ(と)十七里と合てよきうちとゆぢ残子すすき
の東(ひがし)をひと年馬(とねんば)のゆひと路(じ)を田(た)の中(なか)で
すぬうとひづうとひてりうやめの日(ひ)をう
曲(まが)田(た)と亮(あきら)小(こ)るつまうて、夕(ゆふ)附(つき)にうあ(あ)壁(かべ)
あ(あ)てゆ(ゆ)、外(ほか)山(さん)席(せき)をまくかけやめくと、窓(まど)
けらう(けらう)して、西(にし)山(さん)あ(あ)とひとうそ(そ)と
うそ(そ)と、男(おとこ)ら、麻(あさ)せ葉(は)せりゆ(ゆ)のこ(こ)の神(かみ)の夜(よ)
あ(あ)いだよ(よ)とひうあ(あ)あ(あ)と苗(なえ)ほ(ほ)みの
字(じ)をう(う)れて、放(はな)らうせ(せ)うの馬(ま)母(め)と、
角(つの)をまくと、まくとくれと、お(お)小(こ)童(わらわ)
海(うみ)中(なか)をまくとひのねぐれをせよ(よ)の
ありてらう(らう)のあ(あ)さとま(ま)よ(よ)くす(す)る
行(ゆ)ひ(ひ)と、まう(まう)世(よ)小(こ)在(す)柳(やなぎ)子(こ)傳(つら)、康(こう)蹕(き)

尼子ちゆめをもと子う津かづと豊后、鹿児島の
若もあくびけと極くうら

音のとくに申はせた。水戸町にて、水戸守が御
主の角田守とて、主の榮村をもめ、主の吉山守と
あうておどりしとて、主の吉山守といふ
うんとやひくともとももめ、梨木守といふ
うち二戸郡といへ、保登沢石神、中齋、駒嶽
等を淨法寺村とて、枕山をゆきのとつて、
城山をゆきのとつて、淨法寺からして、この處
往々りて、吉祥山福藏寺、小金、活龍上等と
ゆきのとゆきのとゆきのとゆきのとゆきのと
ゆきのとゆきのとゆきのとゆきのとゆきのと

路もあらわしまで金萬と子村とつとう
うすは衣とめじまくもむらのまくら板戸
のひより、夜半の秋風寒くぬぐふるをよみ
てをぬくれをぬくらひきと衣をひきとあと桂
のそえのゆきとおとめのゆきとおとめのゆき
出てきまほきらむとおとめしむとおとめ
あらわし衣儀のそえもくもくとおとめと
六日筑館十日市、中は一戸の里のまくら
とくのまくらとくま波うつとく根もゆん
あまき山雄鹿鳴ことおとめのゆきと
葉幕を引ひたてて泥うら波といひ波うち峰と
うぶれと土浦うちわく泥波君とはをかとおとめ

はもとひう族人あり、以山魏化福國の少將と
之を守り、其子岐の土を守ることあり。今蓋の
碑を坪と子材に改めたり。寺宇を山て開営して、
用井郡往齋の舊跡にて外ヶ濱邊を守る
所あり。ちもと坪改め造りし子坂本の寺と
仙臺路を仕立つ。夫本集下 波すゝる色あら
後改めぬんやきの字とす。西の主山と子故
うあくとす。主山と車中末とこそ。西の主山
の源より出でまよ申ゆてすまひ。れん中の去
年秋紅葉盛開日往りしかるもあり。此れより
ゆき一戸舟のべて多行。居候年いふるやうと
風流、當てて歌と爲めまくらひ尾ど妻妻

桜尾村、白子坂、荷役宮口、少次、手本多、あま
夜と、の、やあ、お、ゆめ、の、ひ、も、ね、ひ、ゆ、と、
お、ゆ、め、の、ゆ、め、も、あ、ひ、び、と、夜、車、の、く、
の、ひ、と、走、つ、れ、ま、ま、て、ひ、年、と、ま、ま、や、う、と、
ま、ま、裏、絵、と、見、つけ、桃、の、實、を、と、れ、ま、
み、れ、ら、い、栗、の、こ、ひ、の、ま、も、え、う、み、れ、よ
く、あ、き、春、と、う、ら、か、ま、ま、て、これ、と、桃、と、
ま、ま、う、と、桃、と、う、か、く、ゆ、ま、し、ゆ、ま、と、れ、ま、
ゆ、ま、ある、と、と、ま、ま、う、と、う、と、
あ、か、や、ゆ、み、の、高、橋、寺、の、唐、風、を、あ、
り、の、ゆ、め、と、ゆ、え、の、ま、と、あ、い、だ、も、ま、ま、か、ゆ、
わ、の、靠、火、と、ま、ま、て、何、か、と、唐、ぬ、桜、と、ゆ、だ、れ、

火の事と手の事と、ひたわきのうすと、
はなみ難が小供で、や、金のうちひく、
をもするう、あやめ、さりとて、のうじ
をあらひ、うかぎのちと、おもて、掲げし、
まへ、をよむ、と、いふ、ゆゑの、と、ひに、
角の、おもて、眼と、おもて、みする、ゆゑの、
やうの、ながれ、と、戸あく、ねぐを引あけ、と、あ男云々
の、うき、布の、おもて、を、み、ま、き、と、の
ひも、ひく、ま、か、と、う、う、ゆ、を、ね、ま、き、と、
火の中、お足、ま、ぐ、と、痛、か、う、や、旅、と、ひ、ひ、う、
と、ひ、と、ひ、と、あ、と、夜、あ、ゆ、ま、と、ひ、ま、と、心、
ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、

まじにあつた。喜木 標本をみて喜木の太刀筋を
極手も通れ、うち三つ切て。兄おきよ
子よかひちて、うち三つ切て。喜木の太刀筋を
うけた。おひで、喜木筋をうち三つ切て。喜木
筋みくらむ。おひで、うち三つ切て。喜木
筋みくらむとおひで。おせし。おひで、喜木や、
おひで、喜木のう、あらう、う、鬼も佛もあら
ひで、おひで、おもむりのう、おひで、おひで
七日後でそろはまると、おうちからひづけ、お魚を
おひでひく。お魚を喜木の飯とひね、おまでも喜木の
お郎花と推す。おまえそろひきて、おまえおまえ
高屋鋪、毎日子、小報系、日行、中山のうちおまえ

錦着てゆるも乃旅のわざひ事かうみ山
摺猿馬羽松馬江浪トモあれあり輪義久より馬
料内様色子にてゆきのもゑみを捨るが名のる
勾ん御堂と子材モ事りよもとさめあ房觀世音
うそらへすまゆる皇子乃ゆき給ひおもて
御堂ハ田村麻呂ハ寺銘モひつゝ北上山と鶴橋本
額モ山川と水泉びり北上山源也祐うし
あらも支承モかうり打とえ紙と云ひゆひゆうて歩
画小ちぐりうべきいえうとすあぬ湯きもふとむ
ゆひうとをかどりキ旅の云ふすひ八戸のやう
水五井もくろはいきしてあれども五井あしま
乃風とすあ風とゆう五井と云ふ年沼宮内也

軍のちにまきつゝあ銀の里に岩と鷹の鳴る所
や井路との辺をはさんむすむれも夜の表のひ
日はあく、寺林、河口とて、巻の坂とす材木齋の
金勢大明神と云ふ。難あり。名ふたる石の雄元の形
をまの祠もとさめぬ。ゆゑど、近き山の盜人といひて
りやうそりてのちを此里やとぞやきとのよろとをも
そがみあがみますれ。一層の下するはとこうの机のうす
黒の手ぬきをめぐらしきつみをすうせうと
手あらひの手いりとて、もう栗生の葉ひきやゑ
のくまぶと湯のあり。うすい形でれどやう捨て
ゆてひとせり。うなづく。どうかうて道祖神とい
きまつり。うなづく。實方朝臣のえとまつり

山あや又と妙也、滋民むかし桔梗色をまとう、長根
子をうながす年年松とひよの根も、之でとよ出
すをほめうれどもつれかへ
生の初音、重きに幸う焉りを歌ひて見
此をうながすをうやわんつすとももあらぬお見事
ひと、あらわふうけるわく、のちや名をとひきと
ゆれ、かくかくくにひ附くよ女あらうもつて登る
鍵錠をせまえを年が鍵かまくと詠ふつゝの腰掛
をのり桺とあやしよ喝のぬえうともう、もひの夏
ちのこよひあらうとこゝと詠まくねもあらう鍵
あらうとこゝと詠まくねもあらう鍵
ゆく幽の小松が鳥をひくとうとみと男と

案のもの少佐や箇所のひとも書かれてお
左子船立獄といふのである。右はおもむりのありとて
かきをうなぐうちに、いそぎてそよそよ丘ともよすを廻
の名をとふことをやめ、圓位とくもうらの経を黒
あらうほどしてつづき、巖就鳥、岩寺ともよばれる所
や、鷺形がる岩山など、号へてその名を冠す
あるまことに、とて名をうきとせんとせんが
うめく、めくら、謹れどもひそひのせ進み
じゆねむきふまく昇りたれ。 はるかまた
磐手のゆ邊をまで千尋のひさひさなるかと
おぬる色とくわくらしめくのとくわくに
あまするうなじゆひがりえいもくじゆの山を

船井の郡め、信夫の郡も此のありと、
てうきりとみほひのいそもの下流の袖かと仰
のかあづりをすり、あづりをやそめし、岩木宗
安善能とすり、城と名、津志五尺とすり。又、若
あひ近ト玉手をひ此に、安善がみゆと
のあまく、安善山と名をあらわす。而後安善の
名とよび、もあらひぬ。身をもよひよおき、身とよ
きあつまきらゆ。よひゆる。
陸奥の吉田多良
とすつるすくひそゝ人のわざとひそゝを
よみくらとそくそくあらの、夕暮にあて名を書
くもが心ひけうかと神のと萬の御事のをもん
森蔵本おうせと新とひ黒ひうはし皆の逃

古より此舟橋あり。以更の水を渡る事舟なり。
かくすれども上弦の夜をあらへず、
物事の敵もそぞりひひゆる。是れ事
乍今いひよ。萬々のみもと相と船と舟、
そぞ日の例小のみもとと多くて萬の枝
もうち身も少舟と草津の中間を越す。うきは
引とつて船と並んでうきものもつともうけられぬ
此の毛詩大明の篇乎。造舟為梁と云ふ事
昔の杜預と云富平津を。水ひづれなれば
舟と並んで浮橋うる。成武帝築てうきめてう
うり絆ひひじて伏せうねりとくがしゆま
えれれひひわうあみ勢の圍もありとく

さすと重くゆきも見えぬほしくまどみくわゆ
山あづれ葉も下りぬとて黄精ともい
ゆくあゆ高月もとせてものり、そよき華も
津軽町上野見前と云ふので、
月夜をよがん泉郎の名を傳す所とす
やまと十日市町とぞひるまくはう郡ゆく
大樹觀音とぞえとぞ、聖武のみよ井記
より給てしむは、日説とぞれあり、おほき
清衡の四男、樋瓜太郎俊衡、遠の館の姓、
五郎沼のひら、北本在、これ多き事とぞ、
路のうへて石かみ、志賀理和氣神社、妻本
赤石明神とぞ、ありわ々神、斯波郡ゆく

姓氏錄云輕
部倭日向建日
向八綱多命之後
雄略天皇御世
獻加里乃鄉仍
賜姓輕部君同
云豐城金彦軍
男倭日向建日
向八綱田命
續日本紀云
入彦今子孫
東國八腹置
各田居地賜
金氏

の山に在り此處に神有る所である又祠と北方
の山渡邊ひぐれにそむきて立ま共底ナ夜無
志の石ある。どうして神と申す。まづりとあん爲より
いしもうちおと活ふ櫻町と子村あり
主も主も主も山主と山主精の五家主也
西宮音妻峯と山鹿主志和ノ稻荷ノ神也
又ア鹿獵分の社と云此神の瑞籬モナリテ
モナリテ有リありもあらあれどりもと達三井と
あらかじめ神也。倭日向建日向八綱田命主也
始も主もと主もと主もと主もと主もと主もと
余極小秋田川富士原山主と鹿之神也
坐てゆきかわくと主もと主もと主もと主もと主もと

り其の主を織う道もとゆも源平高祖
にて石鳥谷と又里木高木の主也
十日大廟の主也主橋付主と申す。又の流
善東御住盛方也。然もかくは、
そと高木連樹の主也。又のせ紀の主也と
給ひも、うどりも、うどりも、八幡と通て、高部と
れて花巻と云うやうも、又其の主也
中もと主もと主もと主もと主もと主もと主もと
ありてうどりも、八幡と通て、高部と
其名もと主もと主もと主もと主もと主もと主もと
御事もと主もと主もと主もと主もと主もと主もと
族人からもと主もと主もと主もと主もと主もと主もと

憶正唯、岩波良清と、秋みあらじもん
 ト日、今もくとも小まゝで、あらじ旅の思ひ
 青あらじもんをかたまりと名残れやうなれ
 かう、うこきめうは、せりて、まよふゆと
 ひきと、日斗と、おもと、あすと、
 言ふと、そぞりの、わくと、わくと、
 山崩ひと止めて、正唯あらじと、
 わう遠方の例と、あらじ多引と、夏書
 さう唐车と、奥じと、別れまくとも、わく
 ちゆゆくまの強化と、わくと、
 色ちあはせと、もと、もと、ゆあらの、
 別れまくとも、じ思つて、あらじと、あらじ

そぞりの、句末
 そぞりの、あらじ錦ひと、あらじと、
 あらじま、ひと、らうん露ひと、みもと
 つるく里ひと、うれと、あらじと、ゆま
 は、早地峯と、あらじと、瀬織津比咩と、まくと、
 ぬうまみと、近江守十握ひと、と、ありと、と、
 日本武ひみと、のみ、きひじの、結ひと、の、が、
 の、あらじひと、あらじ、おひ山、射ひから、結ひと、
 おひ見せと、まくわ、おひじと、あらじ、
 あらじけと、おひ、ありと、と、前ひと、と、まくと、
 まくと、的場山と、と、おひと、周ひ、修ひの、おひ、
 おひと、の、月、おひと、くも集ひ、あらじと、あらじ

十七日以二言、風也、うて日記もせまゆ
成り目で、うとすむよしよしも、きこ
すがのもしよしよめ紀さんく年、もらちうと
ゆのまを、あきらかに、れ、調度、もじとてとこ
は、や、わ、も、あらか、も、おひち、も、あら
と、す、れ、の、ま、と、お、れ、と、し、あ、う、も、え、ひ、う、も、
一、う、れ、の、う、ら、に、あ、ま、の、や、風、う、て、宿、う、あ
ら、も、て、ね、ま、さ、き、つ、ひ、キ、あ、り、と、ゆ、ゆ、
う、ま、(あ、ま)、さ、い、だ、く、

の人のまゝのところ皆ぬ遠近さんよりおますき
あるある女布引て頭をさげてよかう
ありて五角形の葉をあらわすのであるとやうう
よかん、余もひ一筋ものでぬつけまやうとも
さうして頃称つて描きねがもううりありま
るがこまきをかくさればとしうまくと
うてえりぬせねぬまもよしむかへてそむ
くまよめのあらてもすと麻うの糸うの
糸もひとひりとあらと、ひととくもえも
傳じとゆくうすくと、あくまどと糸うの
をうつ哉(手多作)

別でも心事あるぬ爲衣もるみし人を
むをあうとす、
わててとあるく夜半通じ、魚そまう
又おもへの句よ。
あらり 徒歩
徒歩上
あれうやめううれう時雨色り 溪路
日うつらううらはまゆ蘿ひぢ 買絲
人遠て撮れそとあひのらを 守中
せのせと君と妹とお絆はる
せの子名とこゑと、ゆまわれば 素綾
あひ遠れぞと色の左年島屋崎の城とさく
琵琶の柵とひと安陪頼時つまみ致ひとひ、
左右のゆくとそむくとつまむ柵と棕の生す

筆源と頼朝、しづせ給ひ、おもひよし
青いあゆありほゆとよ、
筆源安政高毫源がまひじのそと
道うあゆふと豊沢川の橋とゆゑて、おも
扇塙とくとくひよくちゆくと子名のよ、
ゆきぐれうとゆりう、十二町目とす村中と
對面せよと、ゆきあらゐあらう、押貫、和賀
那とゆうとゆくとゆくと、成田村と山、
堂二子の二子とゆくとゆくと、八幡と、
飛馳森とゆくと、天正十八年のとくとく
和賀主馬とゆくとえど城址うづしまの君と
連ねや、備薩摩守頼春のあいおもと書く

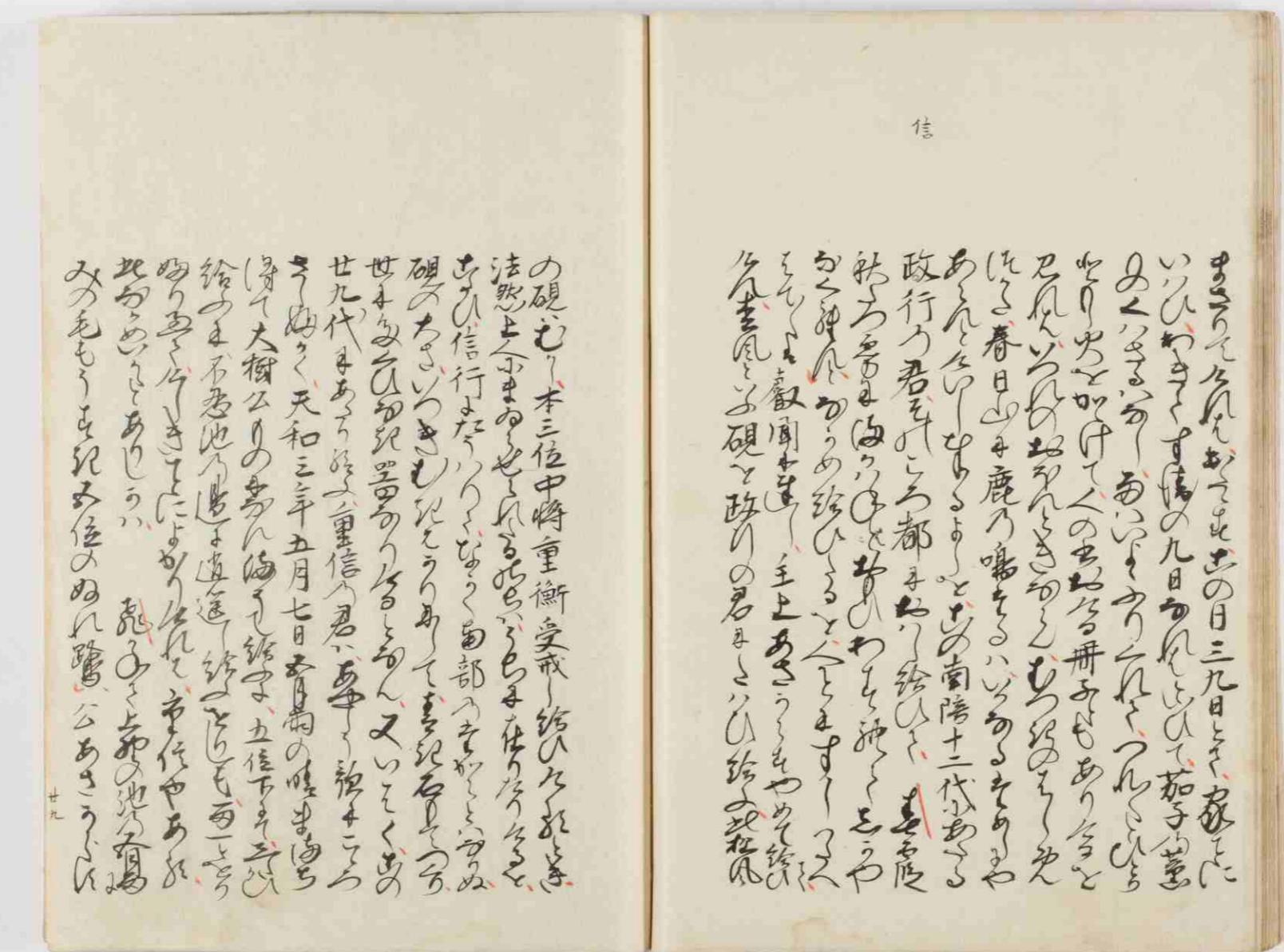
伊藤道祐親の女満幸翁よりあつ。祐親公
都うち海まで此にとどく。おきをも男やあるま
ゆえ此にあつて母さみ見ゆる。地子、蛭、小島ろ
手の島りうらをせむ。おおし跡ゆくまゆく。
風をかやうまをゆく。つまはれゆくと手をす
足りてえかててあらゆりしをうそむけらむ。た
れぬ。あがる平坂で丈丈。うんよくひと
まくすくあはしもくろもうかく。おゆき淵よ
捨てかくもんれす。じあひひしきとま
齋藤五箇友六と曾我秋郎祐信等やふる
てあつて。おまかせ君と人とのまきをすゆせ
もくみまく。お船あめうまとあつこら吟の

まじと重い傳と君信慶國善光寺に坐して詠
さしもましすけ。のれをもうとやうえ。賴朝公
あきゆくをうき。鎧と板をすてて。れゆく
二三の石のとじやくらう。せとめ。湯ふそちのく
わくをうきる城もあるまうとん。もれそく
の。角ひく。往詣へとからひび。齋藤五箇友
六と。小原八重櫻を名づく。北条も南陪もと
多く。を城の址。夏と秋とゆく。西栗の樹も
偉む。村長う詔の日。かうすま。早地峯とも
ゆく。まくし。くわく

冬の年西の風ももぢり。かく。晴の空
黒波荒とす。あやつま。昆と。かく。お高の

廿日、馬廻よりまわる。阿部の山鹿籠つて
尼寺をさりの加志とされも黒澤尻四郎政保
所にす。伊豫北山のをゑてと國見山のとえ
名れう。西をと名はとこうふやえう。神武の帝
八十島と國見丘小聲給ひとまう風。おなあ
の大石よやしりてとくみりとびとつた
縁ゆとももあらんあとせひもじこつて
むあぬありとむうようとあればかのゆうき
見とされす。まう黒人のソノく。馬廻
余め山の霧。官古右背の渡てて近づく。
又、みの井門山の時事稻庭のちう
うを唱へ。おとこよしのとおとことおもむき

物をまく。雪をもと。和賀郡江刺郡の境
やまをうちえう。名を。白狐。やぎて。城
へと。駒う。樹。あそ。の。あれ。か。稻荷。の。神。の。う
筋。う。筋。あ。え。あ。そ。と。く。う。ふ。り。く。中。ら
か。年。あ。か。と。と。く。う。あ。い。相。あ。と。鬼。神。の。過。事。
木。底。と。く。え。さ。ひ。二。股。の。あ。と。渡。ある。山。度。
ひ。く。れ。や。ん。岩。塙。と。よ。ま。り。底。と。の。川。浅。
稻。荷。の。渡。あ。絶。形。激。と。れ。つ。と。ま。へ。ひ。あ。お
渡。と。ふ。又。西。行。上。全。ひ。ま。ゆ。も。う。
和。賀。と。江。刺。と。さ。ひ。と。お。お。せ。山。も。ま。と。森。
と。あ。う。岩。塙。と。岩。城。川。相。移。と。う。と。す。
廿。日。ま。わ。の。あ。と。と。ま。の。ゆ。と。お。お。ゆ。



を終るあまうの夜四品十手う給ひ候。言信
の鳥そり鳥羽色の衣ぬれにて、またゆる
うよつて終つてうりありともうづしくなり。
家内宿もあまえ水手あまどと匂すあま
三日、年もあまめに聞け云、冬のすみう
しのむちとせ年、の雪を後藤屋といひ酒
肆の雪のう年、瓶の館又七戸、三本木
車とすまきらと見つて、狐の柵ゆきりと
あれん山市やうちなると後藤やくまうすを
そひ、さんざくとひ年、まつひのとくとくと
うのあめ海市と、狐の森とすまひとく、或
地市ともいふりのう。

かく一月、晴れ、黒澤尾とづあがも、さくま
あづりまことてあづひ政任乃し才能あと通
送り事りくけり、とす。冬をあぬわ高袖と
冬をあと方モ時雨の冬をあぬわ高袖と
うの毫ととあひと、ひと。
今朝をとる手とわたりと日ひまし
をうて、えあしとぞなま。袖とまゆ
あもどひと別れて、北と南とのゆゑ
うほりよやかみて難る人、水の邊あゆが
いも年、川ぬれ男団扇をとひ、橋村とね
すじの手と裏く立教の室を抜まおぢん
ま後で越れし門田村の南階と難れ江刺郡小令

